教育の原理

歴史・哲学・心理からのアプローチ

光川 康雄
中川 吉晴
井上 智義

樹村房
JUSONBO

はじめに―鼎談１―

光川　はしがきに代えて，本書『教育の原理―歴史・哲学・心理からのアプローチ―』の内容や大学などの「教育原理」という科目について，３人で話し合ってみようと思います。まず，この本の出版意図について，井上先生，くわしくご説明をお願いします。

井上　はい，それではご指名ですので失礼して，この本の出版意図みたいなものについて，話をさせてもらいたいと思います。ちょっと長くなりますけど。

「教育原理」や「教育学概論」のような科目名の授業が，教職課程では必修として，しかも最も重要な科目の一つとして位置づけられているわけですね。教育学の基礎知識というか，これがけっこう難しい内容が含まれているわけです。しかも，この科目を一年次に履修する学生さんが多いので，なかなかとっつきにくい側面のある科目じゃないかなと，ずっと考えていました。私が学生のときの40年以上も前の話で恐縮ですが，私が受けた教育学概論は，先生には悪いんですけど，ちっとも面白くなかった。理解できなかったというのが素直な感想でした。もちろん，私のほうにも問題はあったのですが。

私も教育に関心があって，教育学部に入学したわけですが，現実の教育問題が一度も出てこない，授業の内容は昔の偉い人の話に終始している。今なら，もちろん聴きたい話はいっぱいあるのですが，その頃，大学生になったばかりの学生にとっては，格式が高すぎるというか，雲の上の話を聞かされているようで，少なくとも私には，ほとんど理解できなかった，というか，興味がもてなかったのです。

そこで，いろいろと調べてみると，大学の授業の多くはそうなので，それが悪いとも言い切れないのですが，教育学の専門の先生が，ご自分の一番得意な専門分野のお話をされていることが多いんですね。大学院の授業ならそれでいいのですが，繰り返しになりますが，学部の一年次生が受講するのですから，やはり，教育学入門のような側面があっていいんじゃないかと，そう思うのです。

光川　おっしゃることは，よくわかります。教育学という学問は，高校までの

勉強では，学ばない科目ですからね。とはいえ，学校などで教育は身をもって体験していますから。井上先生と大学は違いますが，私や中川先生も，大学の学部は教育学専攻です。（笑）

井上　もちろん，存じ上げております。ですから，私も教育学の大切な考え方や，過去の偉大な思想家たちの想いや考えを理解することは重要だと思うんですよ。でも，それを理解してもらうためには，十分な解説というか，実際の教育の具体的な話が，それぞれにどのように関連しているのかの説明が必要だと思っているのです。そうでないと，なかなか高尚な専門的な話は理解できないのではと。

光川　そうですね。実際にこうやって教える側になってみると，自分が大学で授業を受けていた時のことを，ともすれば忘れがちです。

学びと教えの違いは，講義の中では注意している大切な点なのですが。それに私は，両方の間にブランクもありましたし。

井上　光川先生は，新聞記者をされてたんですよね。当然，現代の教育問題にも意識が高いと思います。先ほどの話に戻りますが，本書の出版は，教育学の専門家が一人で自分の得意な分野について解説するのではなく，３名の専門領域が全く異なる教育学者が，自分の専門だけが教育学ではないという，当たり前の意識をもって，できるだけ，他の専門の人や，学部の一年次生にもわかりやすいような解説を付けて紹介しようという趣旨と想いで企画しました。ですから，自分が大切だと考えている専門の領域について語るのは，もちろんそうなのですが，３名で書いているのですから，当然，厚みが出るというか，話の幅は広くなると信じています。

光川　そうですね。大学の教育原理を10年以上教えてきましたが，最初の頃は大人数のクラスもあって，なかなかうまくこれまでのテキストをこなせていなかったと感じています。当時の受講してくれた学生諸君には申し訳ない気持ちでいっぱいです。

この科目の受講生のニードと合致していないように思う時もよくありました。言い訳ですが，私は初めには一般教養の日本史を長く教えていましたから，教育の歴史にどうしても力点を置いてしまいます。日本人の過去の学びの姿勢を強調していたら，「歴史だ」と批判されました。学問に限定しているつ

もりなのですが。

では，私よりも長く教育原理を担当されてきた中川先生は，この講義とテキストの関係をどのようにとらえられていますか。

中川　私は一時期，教育原理のテキストを数多く収集したことがあります。そのようなことをする人は，まずいないと思いますが，教育原理の授業をどうすればいいかと考えあぐねていたので，いろいろ参考にしてみようと思いました。しかし，どのテキストも，しっかり書かれているものの，たいていは面白味に欠け，自分自身ですら読み通すことができないようものでした。これでは学生も大変ではないかと思い，使い勝手の悪いテキストは使用しないで，むしろ興味のもてるようなトピックをとりあげて授業を続けていました。

光川　テキストを使用しないと，講義で利用するレジュメの準備や印刷などは大変時間がかかりますよね。講義を休んでいた学生が翌週取りにきたりするとか，雑用が増えますよね。

中川先生は，看護などの専門学校でも「教育原理」を担当されていましたよね。

中川　そうです。なにぶん専門とはあまり関係のない教育学の授業なので，そのときの学生たちには申し訳ないような授業もあったと思います。今回のテキストは，ただ分量ばかりが多くて内容を消化しきれないような従来のテキストとは異なり，一つひとつの項目が非常にコンパクトにまとめられています。字数の関係で説明が少なすぎるように見えるところもありますが，講義のなかでは，むしろ時間をかけずに，うまく活用することができます。また，予習や復習にもたいへん便利です。３名による共著という内容面の広がりもありますが，テキストとしての使いやすさは本書の強みだと思います。

光川　なるほど。さて，私たち３人はそれぞれ専門が違うのですが，井上先生から「歴史で何がわかりますか？」と，聞かれてもきちんと答えられるように教えているつもりですが，学生に通じているか疑問に感じる場合もあります。過去の話と現実の問題との関連の理解が苦手のようです。私も現在やわずかながらでも未来も生きるつもりなんですが……。井上先生の場合，心理学で教育はどの程度わかるものでしょうか。

井上　いやいや，光川先生には，まだまだ活躍いただかないといけないのです

が，確かに未来に向けての教育学というような視点も必要かもしれませんね。

「過去の歴史で何がわかるのか？」というような偉そうなことをいう気はないんですよ。先ほどの発言がそのように受け取られたとすると，お詫びしたいと思います。過去を学ばないと未来の展望はもてないわけですから，偉大な先人たちの知恵を学ぶことは，もちろん有意義だと思います。

ご質問への答えですが，心理学が教育にどの程度貢献できるのかということについてですが，これもなかなか難しい問題だと認識しています。じつは，私はもともと実験心理学者だったのですが，重箱の隅をつつくような細かな話ばかりしていました。読書時の眼球運動とか，同音異義語の理解に必要な反応時間とか，そんなこと調べて何になるの，というのが，私の修士論文でした。

しかし，自分一人でできる内容には限界があるのですが，心理学者もいっぱいいるわけですから，多くの人たちがさまざまな領域でいろんな結論を導き出しているのですね。それらを勉強することによって，教育の分野にも発言することは大いに可能だと思います。たとえば，早くから漢字を覚えさせる早期教育に，どのような意味があるのかと問われたときに，少なくとも，そういう効果は一時的なもので，頑張ってやっても意味がないとか，遊びの時間を削ってまで，そのようなことをしても，子どもためにはならないとか，そういうことは，けっこう自信をもって言える気はします。

光川　なるほど，よくわかりました。井上先生は，認知心理学がご専門だと思い込んでいました。

井上　ええ，かつては一応，認知心理学もやってたんですけど，今は勉強不足で，新しいことについていけなくて。この際，私も教育学者と名乗ってもいいでしょうか。本書では，心理学の内容を直接扱うのではなく，教育学本来の内容を議論しているつもりです。お二人の先生と比べて，もちろん教育理論や教育史には疎いのですが，その分，できるだけ現代の教育問題に関係する内容をとりあげたいと思い，本書の執筆するトピックも選定しました。心理学の人たちからすると，もはや，ここで私が書いている内容は，心理学の話からは逸脱していると思います。教育学者の仲間入りをさせてもらえないのなら，私はどちらの学会からも締め出されてしまいそうです。

光川　いえいえ，そんなことはありませんよ。井上先生の幅広く興味深いテー

マ選定には，企画段階から関心を持たせていただいています。学生諸君が一番聞きたいトピックではないでしょうか。

中川先生の場合，教育思想からのアプローチではどうでしょうか。あるいは，西洋の教育が日本の現代の教育問題にどのように反映できるとお考えでしょうか。

中川　私が担当したⅡ部の前半では，欧米の教育思想史のなかから，重要な人物や考え方をとりあげています。西洋の教育や教育学は，教育や学習についての基本理念や方向性を示しており，教育という現象を理解するうえでいまでも役に立ちます。近代以降の日本の教育もそれらに大きく影響され，基本的にはその流れのなかにあります。

しかしながら，西洋の教育論は，それ自体の暗黙の前提や価値観に制約を受けていることも確かです。たとえば，理性的な個人の形成といった教育理念は，西洋の伝統的な人間観を反映したものでしょう。そうした制約を理解するとともに，東洋的・日本的な人間形成のモデルについても考えていくことは重要であると思います。現在は，西洋教育一辺倒の従来の風潮から抜け出し，より包括的な教育論を生みだしていく時期に差しかかっていると思います。そのためには，本書で試みているように，いろいろな分野の人たちが対話をすることが必要です。

光川　そう思いますね。先ほどの井上先生のお話にもありましたが，研究分野の異なる私たち３人の対話も効果があるとうれしいですね。

井上　ほんと，そのように思っています。教育思想も，同じ領域だけだと限界があると。

中川　そうですね。ところで，その一方で興味深いことなのですが，このような脱構築の動きは，最近では，西洋の教育論自体にも起こっていることなのです。多文化社会とグローバル時代の到来もあり，西洋の教育論のなかに，東洋をふくめた多様な文化から，さまざまな考えや方法が取り入れられるようになっています。この20年ほどのあいだで教育学はかつての面白味のないものから一変して，非常に創造的な展開を見せるようになってきています。Ⅱ部の後半では，そうした議論のなかから，現在では主流の教育のなかでも論じられるようになった諸動向をとりあげています。それには，ホリスティッ教育，ケアリ

ング，スピリチュアリティ，観想教育，感情や身体の教育など，興味深いテーマや実践があります。これらは日本の教育問題の解決に向けても貢献してくれるものだと思います。その意味では私たちは，あらためて西洋の教育から学ぶべきことがあるように思います。

光川　ありがとうございました。お二人のご意見をうかがって，私もさまざまな刺激を受けました。

教育という行為じたいは誰もが体験しているため，教育私観というか私的な教育論のような考えをもちがちなので，それらを生かしつつ，教育学という科学に引きつけていくのが難題だと思っています。時代は違っても，人間そのもののメンタル面は，共通する部分もあるというのが私の見解の根底にあります。

そこで，古代人や中世人，さらに近世人それぞれが「自学」という概念をどのようにとらえていたかをトピックの素材に考えました。もちろん，私の関心があり，研究したことのあるテーマになりましたが。近代は，広く教育文化史の展開という面から従来個別の分野の方々だけが考察したトピックもあります。

『小倉百人一首』や『風姿花伝』などの古典をはじめ，唱歌や遊び歌の歌詞に注目するなどの文化史学の方法論を取ってみたりもしました。また，新島襄と同志社や予備校の教育，さらに1960年代末の学園闘争などについては，個人的な思い入れが強く入ってしまいました。社会科学の１科目である教育学は，人文科学でもある雑学だと思っています。同志社大学は教育文化学ですし。人間を中心において教育学を再構成していく手がかりにしてゆきたいと考えています。

巻頭から，まとめにならない私見をながながと述べてしまいました。

もくじ

はじめに―鼎談１― ……3

Ⅰ　日本の教育：むかしと今 ……（光川康雄） 11

Ⅱ　海外の教育：むかしと今 ……（中川吉晴） 59

Ⅲ　教育の課題と展望 ……（井上智義） 115

むすびに代えて―鼎談２― ……165

引用・参考文献 ……169

I

日本の教育：むかしと今

1　古代の文化交流と「文字学び」の始まり……*12*
2　「聖徳太子」を教育史でどう考えるか……*14*
3　大学寮は不振，その訳は？……*16*
4　天神さまと学問の神様を知っている？……*18*
5　『小倉百人一首』と教育文化史的な意義……*20*
6　伝統的な公家の学問とは？……*22*
7　世阿弥の『風姿花伝』に見る教育法と子ども……*24*
8　キリシタンの学校と世俗教育……*26*
9　中世から近世の武士教育の転換とは？……*28*
10　家訓・遺訓から徒弟教育へ……*30*
11　寺子屋（手習い所）の教科書とその学びは？……*32*
12　私塾の師弟関係と「教育愛」とは？……*34*
13　新島襄と同志社英学校の精神……*36*
14　近代公教育制度の変遷と「教育勅語」……*38*
15　唱歌の歌詞による国家主義の高まり……*40*
16　歴代天皇と歴史教育について……*42*
17　柳田國男と「社会科」―“一人前になる教育”―……*44*
18　学園闘争の季節―1960年代前後―……*46*
19　予備校の教育って？……*48*
20　日本における「教育」と大学入試……*50*
21　大学における学部の盛衰―「実学」とは？―……*52*
22　教育基本法を教室で読もう！……*54*
23　人物教材と教育学の研究―古代・中世の日本の教育史の場合―……*56*

Ⅰ－1　古代の文化交流と「文字学び」の始まり

自覚しないで生活の技術などを親から子へ，長老から若者へと伝えていったのが，人間による教育の始まりである。腕力や体力だけでなく，知恵の伝授である。それに加えて，自覚的な教育―文字学びは，いつ頃どのように開始されたであろうか。その役割を果たしたのが中国大陸や朝鮮半島からの渡来人の存在である。原始社会から古代国家の誕生にいたる背景に，漢字および儒教・仏教の伝来があったと考えられる。4世紀から5世紀にかけて大陸や半島から幾度にもわかれてやってきた人々が新文化をもたらしている。国家レベルの交渉もあるものの，対馬・壱岐などの日朝間の中間に位置する地域では活発な人的交流があり，国の相異などは問題にならなかったのではないだろうか。

平安時代初期の成立である『古語拾遺』には，わが国に「古来文字なし」とある。奈良時代初期に成立した『古事記』『日本書紀』には，「応神天皇」の時代に「王仁」という百済から来日人が「『論語』『千字文』」を伝えたと記されている。年代に信憑性はないものの，「倭の五王」の時代に伝わったという記憶が一部の学識者の間にあったものと推定できる。また，『宋書』中の倭王の武は，「記紀」の雄略天皇にあたるとされ，埼玉県稲荷山古墳の出土遺物の「ワカタケル大王」にも該当しているとの考えがほぼ定説になっている。この雄略天皇が，『万葉集』の冒頭の和歌の作者とされ，『日本霊異記』の最初の説話も雄略天皇にちなむものである。これらのことから，古代の僧侶や貴族層の間には，雄略天皇を文化面では画期を示す人物であると考えられていたとの見解も許されるのではないだろうか。5世紀後半に大きな文字文化の始期を想定することができるかもしれない。この後のわが国内での大王・豪族層における「文字学び」の変遷について見ていく時，渡来人との漢字を通しての筆談に始まり，家庭教師らによる漢文の音読指導を経て，日本語への訓読理解へ至る。その際，日本人による日本語的な理解を助ける手段として「かな文字」の発明と，その発達・利用があろう。以上のような漢字習得の変遷を歴史的に考えてみる時，現代人はあまり音読を行わず，漢字の筆写も反復していないと思う。

■倭の五王時代の渡来人（『古事記』・『日本書紀』）

弓月君（秦氏の祖）	養蚕・機織り技術	新羅
王仁（西文氏の祖）	『論語』『千字文』⇒文筆・出納に従事	百済
阿知使主（東漢氏の祖）	文筆に優れ，史部を管理	百済

■関係史料

『日本書紀』（720年成立）

「（応神天皇）十六年春二月，王仁来れり。則ち太子菟道稚郎子，師としたまう」

『古語拾遺』（807年成立）

「蓋し聞く，上古の世，未だ文字有らず。貴賤老少，口々に相伝う」

『万葉集』（770年頃成立）

「（大泊瀬稚武天皇）〈雄略天皇〉御製の歌

籠もよ　み籠持ち　ふくしもよ　みぶくし持ち　この岡に　菜摘ます児　家告らな　名告らさね　そらみつ　大和の国は　おしなべて　我こそ居れ　しきなべて　我こそいませ　我こそば　告らめ　家をも名をも」

■古代を実感する方法序説

自分の生まれ育った国の誕生やその文化，とりわけ「文字学び」の変遷について，もっと関心を持ち，自分で調べてほしいと思う。国語学や日本史・考古学などそれぞれの専門分野で何がわかっており，何がまだわかっていないのかを知ることは大切なことである。学生の教養として，子どもたちに教える大人として，学際的な幅広い分野の基礎知識を身につけて行きたいものである。まずは，「知的好奇心」を持とう！

そのためにも，関係する文献（日本や中国の古典）を読むことと，各地の博物館・宝物館・美術館などへの見学をお勧めする。身近な施設としては，全国に４か所ある国立博物館（東京，京都，奈良，福岡）などを手始めに訪ねてみてはどうだろう。早朝の寺院や神社を訪れる方法もある。古代にこの日本列島で生きていた人々（私たちの祖先）が使っていた道具や信仰などの対象となった品々は，何かを訴えかけてくるかもしれない。遺物にじっと耳を傾け，それらを直視しよう！

Ⅰ－2　「聖徳太子」を教育史でどう考えるか？

日本史を代表する人物の一人として，聖徳太子（574～622）がいる。なぜ，この人物が著名であり，長く人々の記憶に残ってきたかを考えてみたい。

『日本書紀』によれば，わが国最初の女性の天皇である推古天皇の皇太子であり，摂政であったとも称せられている。憲法十七条を筆録したほか，四天王寺・法隆寺などの寺院の建立や『勝鬘経』『法華経』の講義など，飛鳥時代の政治や文化のリーダーとしての業績があげる人が多い。歴史学の世界では，「聖徳太子」はいなかった！　とまで，説く見解もあり，高校教科書もいつの間にか「厩戸皇子（聖徳太子）」と記述されている。天皇号の成立が，天武・持統天皇の時代（7世紀末）にまでずれ込んでいる現状の考え方からいえば，これでも本当は中途半端であり，厩戸王とすべきかもしれない。

しかし，日本の教育を考えてゆく時，聖徳太子と称せられた人物が当時の官吏に教訓的な憲法を作り，律令制度の先駆となったと長く語り伝えられたことは間違いない。今は名も伝わらない渡来系の人たちの業績を統括して，飛鳥文化として花開いたものと考える。実際に，漢字や儒教の伝来についても，東西史部の祖先である渡来人の果たした役割が大きかったのである。聖徳太子説話においても，渡来系の学者や朝鮮半島からやってきていた僧侶の教育文化的な指導があったことは当然のことであろう。朝廷政治家が，仏教経典を天皇に講義したり，仏典の注釈書を執筆したりすることはまず無理であろう。太子の業績について，冠位十二階や遣隋使の派遣なども掲げられている古代史書も多いが，これら二つの主体は「皇太子」とは必ずしも記されておらず，推古天皇や大臣の蘇我馬子の果たした偉業であるとの見方も成り立つだろう。『紀』崇峻天皇の時，百済に留学尼を派遣している事績などは等閑視されている。

最後に，後世の聖徳太子信仰の影響には十分に配慮して，「飛鳥の文明開化」を考察すべきであろう。『日本教育の祖』と称して，役人の心構えを説く憲法の執筆・女帝への経典の講義や遣隋留学僧・留学生の派遣などをあげられるが，『紀』の史料的な性格を踏まえた史料批判が必要となるという歴史学の常識を忘れてはならないと考える（光川，2008）。

図Ⅰ－1　聖徳太子像
（鶴林寺，兵庫県加古川市）

■推古朝に来朝した主な渡来人

曇徴（高句麗）	紙，墨，彩色の法
観勒（百済）	暦法，天文，地理
恵慈（高句麗）	仏教，聖徳太子の師
覚哿（百済）	儒教（五経博士）

なお，五経博士は継体天皇の頃から交代で来朝

■聖徳太子関係年表（説話も含む）

587年	物部戦争に従軍
593	皇太子となる，四天王寺創建
603	冠位十二階制定
604	憲法十七条制定
607	遣隋使派遣，法隆寺創建
611～5	「三経義疏」を著す？
620	歴史書「天皇記」「国記」編纂

■関係史料

『**日本書紀**』「（推古天皇十一年十二月）壬申，始めて冠位を行ふ」

「（推古天皇十二年）夏四月丙寅の朔戊辰，皇太子，親ら肇めて憲法十七条を作りたまふ。一に曰はく，和を以て貴しと為し，忤ふることなきを宗とせよ」

「（推古天皇十五年秋七月）庚戌，大礼小野臣妹子を大唐に遣はし，鞍作福利を以て通事と為す」

「（天智天皇九年夏四月）壬申，夜半之後に法隆寺に災けり。一屋も余すこと無し。」

■後世（各時代）における評価も大切

「聖徳太子」にちなみ飛鳥時代を代表する法隆寺や四天王寺，さらに飛鳥地方（蘇我馬子の飛鳥寺や石舞台）などをめぐって，「飛鳥の文明開化」の雰囲気を味わえることは，すばらしい先人のおかげであることも知っておきたい。平安時代以降に「聖徳太子」を偉大な教育者としてみなされることになった経緯を考えることも必要だろう。唯一，江戸時代の儒学者（林羅山など）からは蘇我氏と共に批判的に記述されているのである。また，戦前には物部戦争に従軍したことを賛美したり，逆に戦後は平和主義者としての評価が加えられていることにも注目したい。

むすびに代えて—鼎談２—

光川　最後に本書『教育の原理—歴史･哲学･心理からのアプローチ—』の執筆を終えられて，冒頭の鼎談をふまえての感想やご意見などをお話しいただけませんでしょうか。それでは，今度はⅡ部の27トピックを担当されました中川先生から，よろしくお願いします。

中川　私の担当したⅡ部の前半では，おもに西洋教育のオーソドックスな考え方を紹介し，後半では比較的最近の動向をとりあげました。過去のものとはいえ，やはり偉大な教育思想家の仕事は教育を理解するために不可欠なものであると感じました。若いみなさんにも，ぜひ彼らの作品を読んでいただきたいと思います。また最近の動向については，日本での紹介が少ないので，もっとこういうことを知っていただきたいと思っています。そうすれば，教育についての関心も高まるのではないかと考えています。

光川　中川先生は欧米の教育だけでなく，東洋の教育にもお詳しいですからね。今回，インドのお話も入っているかと思ったのですが。そのあたりに関しては，いかがでしょうか。

中川　私の関心は現在ではむしろアジアや東洋の教育の考え方のほうにありますので，もっと多くそうした項目をとりあげればよかったのですが，今回は，人物としてはクリシュナムルティだけをあげています。ほかにも，タゴール，オーロビンドといった人たちは学校をつくっており，教育論もあるので興味深い存在です。今回とりあげたなかでは，観想教育（マインドフルネス）はもともと仏教瞑想から生まれたものですし，最後には，東洋的人間形成という項目を設けました。すでにインド思想や仏教は現代の教育論にいろいろと影響を及ぼしていますので，今後も注目していきたいところです。

光川　なるほど，幅広い視野からの魅力的な話題が盛りだくさんですね。中川先生，ありがとうございました。

それでは，Ⅲ部の24トピックを執筆されました井上先生のご意見や執筆後の感想はいかがでしょうか。

井上　はい。今の教育問題に直接触れたほうがよいという思いで，これが問題

だなと私が思っていることを中心に書かせてもらいました。でも，あまり専門でもないことまで書いているので，内容が浅くてすみません。お二人の原稿を読ませてもらって，その点は反省しています。お二人の内容，じつに興味深かったです。先ほどの中川先生のお話ですが，私も中川先生のご専門は西洋教育哲学だけだと思っていたのですが，じつに幅広くて興味深い。西洋の教育理論だけでは，行き詰まっていて，東洋の思想が必要というところも感銘を受けました。また，光川先生の日本教育史は，現在も含む教育史ですね。私たちが学校で習った日本史では，明治以降があっさりしすぎている。ここが教育にとっては，一番重要なのにと思っていました。昭和もなるほど，もう歴史の範疇ですね。私たちの青春そのものでしたけどね。唱歌や予備校の話は，確かにそう言われるとそうだなと，光川先生しか書けない内容かと思いました。ご質問の私の話に戻しますが，ろう教育や特別支援の話は，私の昔の専門でした。

光川　井上先生の昔のご専門といいますと。

井上　私が初めて大学に勤務したのは，大阪教育大学が最初で，1982年のことだったのですが，その時の所属が聴覚言語障害児教育教室という長い名称のところでした。そんな関係で，そのあたりのことや子どもの発達や心理については，その頃，勉強していたテーマだったんです。もちろん，今回の執筆にあたっては，自分なりには，新しいことも勉強したんですけどね。

光川　そんなご苦労もあったのですね。よくわかりました。井上先生が現在もっとも関心をお持ちの分野に限定してのご意見はございますか。

井上　ちょっと，このテーマで，もう一つ研究をして，それが終わったら，この世界から身を引こうと思っていることがあるのですが。

光川　ええ，そうなんですか？　ちょっと早すぎないですか。

井上　いやいや。それで，その最後の研究テーマは，トピックのⅢ－18で書いている「イマージョン教育」なのですね。こちらは，私が専門にしている一つの教育方法に関することなのですが，英語をいくら勉強しても話せない，という教育問題の一番の解決方法はこれだと信じているのです。いわば私の信念みたいなもので。その効果が最後の研究で実証することができたら，大学からの退職を考えているのですよね。あと２，３年で。そのほか，異文化理解や多文化共生の話も，現在の関心事です。日本の教育は，そういう点で，カナダやオ

ーストラリアに，ずいぶん遅れをとっていると思います。さらに言うと，教育政策の不備ですね。

光川　わあ！　続きはぜひ今夜のお酒の席で。教育による革命論なら，私にもぜひ語らせてください。（笑）

井上先生，ありがとうございました。私は，年長であるのと日本の教育史を専門にしておりますところから，Ⅰ部の23のトピックを書かせていただきました。決して過去の歴史を高く評価するつもりはありませんが，教育の場合これまでの日本人のつくってきた教育遺産の経験談なども，現在のそしてこれからの教育問題を語る場合にかかせないものだと考えています。本当は理想的な未来像というかビジョンを示したいのですが，私は日本というこの国の歴史の変遷の中から何かを学び，一部は受け継いでいきたいと思うようになってきています。年齢のせいでしょうかね。（笑）

井上　いやいや，まだまだお元気すぎると思いますよ。（笑）　次の機会には，ぜひ光川先生がお考えの理想的な教育の未来像をお聴かせいただきたいと思います。ちょっと，ここで，この本を出していただく樹村房からの出版物で，私がかかわった書物の広告をしてよろしいでしょうか。

光川　はい，どうぞ。

井上　じつは，樹村房から，すでに『教育の方法』という本と『発達と教育』という２冊の本を出していただいております。地味に売れている本ですが，こちらの２冊も，ぜひ，読んでいただければ幸いです。

光川　最後に，井上先生が主体になってつくってこられた３部作の最後の１冊に，かなり実験的な要素もあるこの本が温かく迎えられるとよいのですが。お二人の先生方，どうもありがとうございました。

そして，本書を丁寧に編集・レイアウトし出版していただいた樹村房の大塚栄一社長には，厚くお礼を申し上げなければいけません。本当にお世話になりまして，ありがとうございました。

2016年２月２日

光川 康雄
中川 吉晴
井上 智義

［執筆者］

光川康雄（みつかわ・やすお）

1975　同志社大学文学部文化学科教育学専攻卒業
1985　同志社大学大学院文学研究科文化史学専攻博士前期課程修了（文学修士）
1988　同志社大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学
現在　同志社大学社会学部嘱託講師
主著　『人物で見る日本の教育　第２版』（分担執筆，ミネルヴァ書房，2015），『日本思想史辞典』（項目執筆，山川出版社，2009），『文化史学の挑戦』（分担執筆，思文閣出版，2005），『日本史教育における感性と情緒』（分担執筆，教育出版，1989）

中川吉晴（なかがわ・よしはる）

1981　同志社大学文学部卒業
1983　同志社大学文学研究科博士前期課程修了
1986　同志社大学文学研究科博士後期課程退学
2000　トロント大学大学院オンタリオ教育研究所博士課程修了（Ph.D.）
現在　同志社大学社会学部教育文化学科教授
主著　『ホリスティック臨床教育学』（単著，せせらぎ出版，2005），『気づきのホリスティック・アプローチ』（単著，駿河台出版社，2007），『スピリチュアリティと教育』（共著，ビイング・ネット・プレス，2015）

井上智義（いのうえ・ともよし）

1978　京都大学教育学部卒業
1980　京都大学大学院教育学研究科博士前期課程修了
1982　京都大学大学院教育学研究科博士後期課程中途退学
1997　京都大学博士（教育学）
2005　同志社大学社会学部教授
2018　同志社大学名誉教授
主著　『発達と教育』（共著，樹村房，2012），『誤解の理解』（編著，あいり出版，2009），『教育の方法』（共著，樹村房，2007），『福祉の心理学』（単著，サイエンス社，2004）

教育の原理　歴史・哲学・心理からのアプローチ

2016年３月18日　初版第１刷発行
2020年９月１日　初版第３刷

著　者 © 光川康雄
中川吉晴
井上智義

〈検印省略〉

発行者　大塚栄一

発行所　株式会社 樹村房 JUSONBO

〒112-0002
東京都文京区小石川5-11-7
電　話　03-3868-7321
ＦＡＸ　03-6801-5202
振　替　00190-3-93169
http : //www.jusonbo.co.jp/

印刷　亜細亜印刷株式会社
製本　有限会社愛千製本所

ISBN 978-4-88367-261-5　乱丁・落丁本は小社にてお取り替えいたします。